2. ロシア史におけるウクライナ

2.1. はじめに：主権国家としての「ウクライナ」の歴史は短い

ウクライナというと、そういう国家がずいぶん以前から存在していたと考える人が多いかも知れないが、歴史上、ウクライナという国家が登場したのは、1991 年末のソ連解体の結果である。つまり、国家としてのウクライナの歴史は、25 年ほどしかない。確かに、ソ連（正式名称は、ソヴィエト社会主義共和国連邦）が存在していた時代、ウクライナ共和国（正式名称は、ウクライナ・ソヴィエト社会主義共和国）がソ連の中に存在していた。しかし、当時の国際法上の主権国家はソ連であり、ウクライナ共和国は、連邦制を採用するソ連という国家の中にある連邦を構成する 15 のユニット（当時、ソ連専研究者のあいだでは、連邦構成共和国、と呼ばれていた）のうちの 1 つに過ぎなかった。ソ連憲法は、各連邦構成共和国のソ連からの離脱を認めていたが、ロシア共和国（現在のロシア連邦、当時の正式名称は、ロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国）やウクライナ共和国を始めとする 15 の共和国が独立国家として国際社会に承認されたのはソ連解体の渦中またはその直後のことである。したがって、ソ連時代、ウクライナ共和国と、同じソ連の連邦構成共和国であるロシア共和国、白ロシア共和国（現在のベラルーシ。当時の正式名称は、白ロシア・ソヴィエト社会主義共和国）、モルダヴィア共和国（現在のモルドヴァ。当時の正式名称は、モルダヴィア・ソヴィエト社会主義共和国）とのあいだに引かれていた境界線は、国境線ではなく、ソ連国内の国内境界線であり、日本で言えば都道府県境界線と同様のものであった。他方で、確かに、当時のウクライナ共和国は、ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリー、ルーマニアとのあいだに国境線を持っていたが、これはウクライナ共和国の国境線ではなくソ連の国境線であった。つまり、ウクライナはソ連時代、事実上、ソ連の一つの行政区画に過ぎなかった。

2.2. キエフ・ルーシ

では、ロシア帝国の時代はどうであったのか。さらに、それ以前は？　そこで、少し古い話になるが、9 世紀まで歴史を遡ることにしよう。登場するのは、ウクライナではない。ルーシという国家である。

ルーシと呼ばれる国家が、現在のウクライナからヨーロッパ・ロシアにかけての地域に、東スラブ族によって形成されたのは 9 世紀末のこととされる。ルーシは、スカンジナヴィア半島・バルト海と黒海・ビザンツ帝国とを結ぶノルマン人の交易・通商ルートに位置していた。このルート上のヴォルホフ川中流にノヴゴロド、ドニエプル川中流にキエフというルーシの二大都市が建設された。

『原書年代記』によると、ルーシの人々がノルマン人に対して「ルーシは広大で豊かだが争いが絶えないので、ここに来て統治してほしい」と要請し、ノルマン人のリューリクがノヴゴロドに王朝を創建したとされる。2 代目の王、オレグ将軍がキエフを攻略し、キエフ・ルーシの歴史が始まった。

その後、キエフ大公ウラジーミル 1 世がビザンツ帝国からキリスト教（正教）を国教として導入、キエフ・ルーシは最盛期を迎えた。ルーシの発展の中で、モスクワやミンスクといった諸都市も発展した。

2.3. キエフ・ルーシの衰退

しかし、キエフ大公ヤロスラフ賢公が 1054 年に没したあと、キエフ・ルーシは最大 15 の公国に分裂し、ルーシの地のその後の歴史は、おおむねキエフを流れるドニエプル川の東西で異なる展開を見ることとなる。

ルーシの西部は、12 世紀から 14 世紀にかけてガリツィア･ヴォルイニ大公国がリヴィウを中心に発展した。しかし、ガリツィア･ヴォルイニ大公国は、1340 年に貴族の反乱が続発する中、ポーランドとリトアニアに分割され、ドニエプル川西岸の西ウクライナ地方はポーランド・リトアニアの支配下に置かれることになる。

他方、ルーシの東部は 13 世紀から 15 世紀にかけてモンゴル系のキプチャク・ハン国の支配下に置かれた。その支配下で台頭したのがモスクワ公国である。モスクワ大公イヴァン 3 世は、1472 年、ビザンツ帝国最後の皇帝の姪ソフィアを妻に迎え、ビザンツ帝国の正当な後継者を名乗ってツァーリと称し、ビザンツ帝国の双頭の鷲の紋章をモスクワ公国の国章として採用してモスクワを第三のローマと唱えた。そしてイヴァン 3 世は、1480 年、キプチャク・ハン国を破って独立を達成した。モスクワを首都とするロシアの登場である。

今日の東西ウクライナの文化的差異の背景にはこのキエフ・ルーシ分裂後の歴史的発展における東西の差異があると考えられる。しかし、17 世紀以降のロシアの発展・拡大が、再びルーシの地を統一することになる。

ロシアは、1598 年のリューリク朝の断絶後の動乱を経て、1612 年にロマノフ朝が成立、さらなる発展を遂げる。当時のドニエプル川東岸の東ウクライナ地方には、ロシア帝国の支配下で一定の自治権を有するコサックのヘトマン[1]国家が存在していた。しかしヘトマン国家の自治権は徐々に浸食され、1782 年、ヘトマン国家はロシア帝国の直轄領となった。この 18 世紀末の時期は、プロイセン、オーストリア、ロシア三国による 3 次にわたるポーランド分割[2]が行われた時期でもある。その結果、ロシアは、現在のバルト三国、ベラルーシ、ウクライナのほぼ全域を支配下に置くことになったが、リヴィウを中心とするガリツィア地方はオーストリア領となった。またクリミアを含む南ウクライナは、15 世紀半ばから 18 世紀半ばまでは、クリムハン国およびオスマン帝国の領土であった。

2.4. ソ連期のウクライナ

1917 年のロシア帝国の解体は、ロシアからのウクライナの独立の契機となった。しかし、キエフに成立したウクライナ・ラーダ政権は、ボリシェヴィキと対立し 1918 年初頭までにボリシェヴィキの覇権が確立した。その後、ウクライナは、ボリシェヴィキとそれに反対する諸集団による内戦の主戦場となった。西ウクライナでは、1918 年末までにリヴィウを中心に西ウクライナ人民共和国の成立をめざしたが、ポーランドともボリシェヴィキとも対立し、最終的に 1921 年 3 月のリガ条約により、ガリツィアはポーランド領となり、この状態が 1939 年末まで続くこととなった。

内戦がほぼ終了した 1922 年 12 月、ロシア共和国、ウクライナ共和国、白ロシア共和国、ザカフカース[3]・ソヴィエト社会主義共和国によりソ連が結成された。このときのウクライナには前述のようにガリツィアが含まれていなかったが、その後、ソ連の拡大によ

---

[1]「ヘトマン」はコサックの「頭領」の意。

[2] 第 1 次分割 1772 年、第 2 次分割 1793 年、第 3 次分割 1795 年。

[3] ロシア語の名詞では「ザカフカージエ」と発音するが、日本での慣用に従って「ザカフカース」とした。

り、ウクライナも領域を拡大していく。

第 2 次世界大戦直前の 1939 年 8 月 23 日に、ドイツとソ連とのあいだで独ソ不可侵条約が締結され、その秘密議定書により、それまでポーランド領であったガリツィア地方がソ連領となり、1939 年 12 月 4 日、ウクライナ共和国にヴォルィーニ州、リウネ州、リヴィウ州、テルノーピリ州、スタニスラーウ州（1962 年 11 月 9 日にイヴァーノ=フランキーウシク州に名称変更）が編成された。

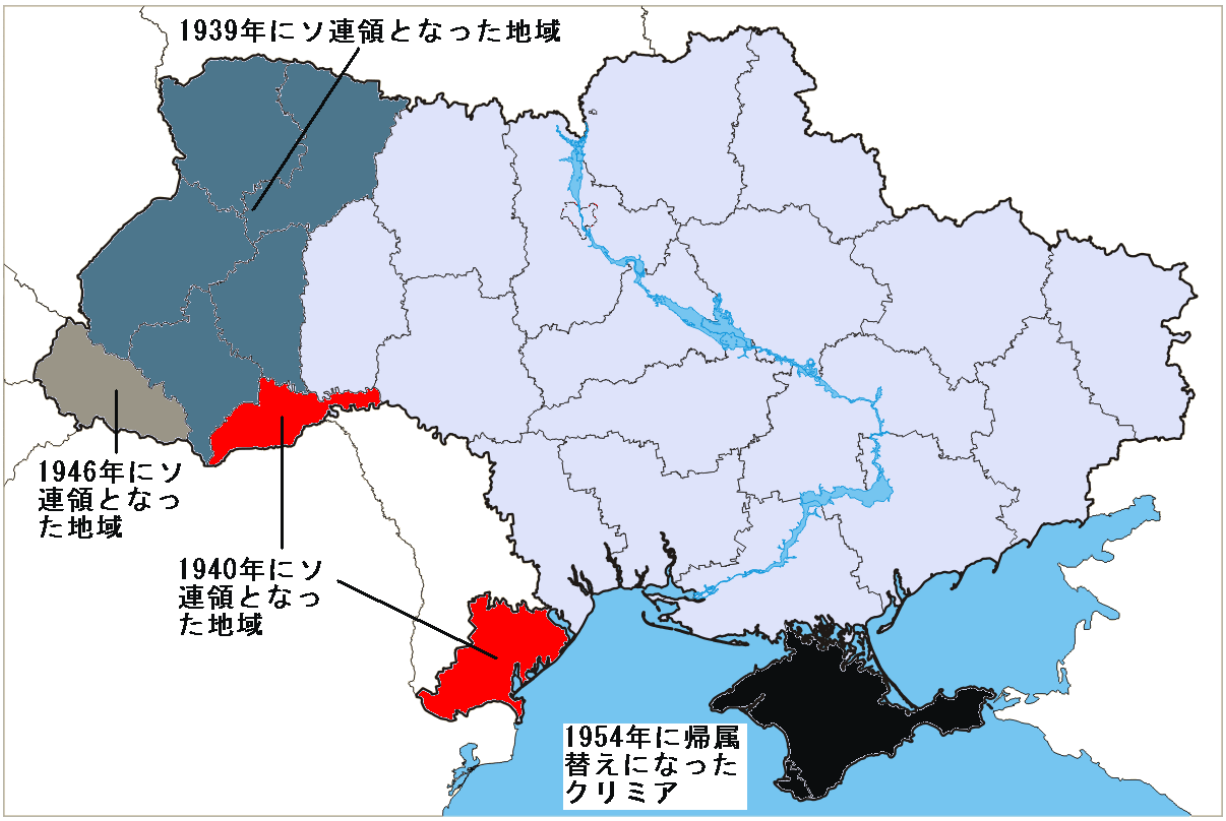
次いで第 2 次世界大戦中の 1940 年 8 月 2 日、ルーマニアのベッサラビアがソ連領となり、その大半はモルダヴィア共和国となったが、黒海沿岸の南ベッサラビアはウクライナ共和国オデーサ州の一部に、モルダヴィア共和国北方の北ブコヴィナはウクライナ共和国チェルニウツィー州となった。その際、そのかわりにそれまでウクライナ共和国領であったドニエストル川東岸地域がモルダヴィア共和国に組み込まれた。

さらに第 2 次世界大戦直後の 1946 年 1 月 22 日、それまでチェコスロヴァキアの一部であった地域がソ連領となり、ウクライナ共和国ザカルパッチャ州となった。

そして最後に 1954 年 2 月 19 日、クリミアがロシア共和国からウクライナ共和国に帰属替えになり、ようやく現在のウクライナの領域が完成された。

このように、ソ連時代、ウクライナ共和国の領土は徐々に拡大しているが、とくに独ソ不可侵条約秘密議定書によりポーランド領のガリツィア地方がソ連領となり、ウクライナ共和国に上記 5 州として組み込まれたことを含め、キエフ市とセヴァストーポリ市の特別市を除くと、25 州 1 自治共和国（クリミア）からなるウクライナ共和国のうちの 5 分の 1 以上の 6 州 1 自治共和国が 1939 年から 1954 年にかけて、ポーランド、ルーマニア、ロシア共和国から併合された土地であったことは、先に述べたドニエプル川の東西における歴史的発展の差異とともに、今日のウクライナ問題を考える上でできわめて重要である。

2.5. おわりに

東西ウクライナの差異を言う議論は多い。しかし、それ以上に、ウクライナが、ロシア帝国の最も強い影響下にあった最東部ウクライナ、ドニエプル川東岸のヘトマン国家の領域であった東ウクライナ、クリムハン国およびオスマン帝国の支配下にあったクリミアを含む南ウクライナ、18 世紀末のポーランド分割までポーランド支配下にあったドニエプル西岸地域、さらに第 1 次世界大戦から 1939 年までポーランド領であったガリツィア地方、そしてそれ以外のカルパッチャ州、北ブコヴィナ、南ベッサラビアなど、多くの異なる歴史的文化的背景を持つ地域から成り立っているということに留意する必要がある。つまり、今日、ウクライナと私たちが言っている国家それ自体がソ連解体の結果であることはすでに述べたが、さらにその領域も、実は、多くの異なる歴史的経緯を持つ地域の寄せ集めであり、クリミアがウクライナと呼ばれる地域に帰属替えされたのは第 2 次世界大戦後の 1954 年のことに過ぎないのである。そして、この寄せ集めの行為それ自体も「ウクライナ人」という集団が、いわば分断され断片化してしまった国家を再統一するように自ら主体的におこなってきたわけではなく、その時代その時代の大国間のパワーゲームの結果としてなされてきたものであり、最後のクリミアの帰属替えについては、第 2 次世界大戦後のクリミア経済の再建に関連しての当時のソ連指導部の政策的判断の結果であった。

こうしたウクライナの複雑かつ国家がモザイク的に形成されたという歴史は、今日のウクライナ政治を複雑なものとしている。ウクライナ政治を、親露派と親欧米派との対立という単純な構図で見ることは、問題の本質を見逃すことになる。ウクライナは、国家形成過程の多様さゆえに、地域的な多様性が大きく、それがエリートの対立となって現れていると考えられる。そして、まさに次項の言語問題に象徴的に示されているように、ウクライナの国家的アイデンティティを形成すること自体が非常に難しい問題をはらんでいる。